

事に伴う事前調査（第八三―七次調査）で、宮中心部を南北に縦貫する南北大溝SD一九〇―Aから木簡一点が出土したが、断片であり釈読できない。

また、飛鳥池遺跡の一九九七年度の調査（飛鳥藤原第八四次調査）でも多数の木簡が出土したが、同遺跡は一九九八年度も継続して調査中であり、また木簡についても現在整理途中であるため、次号に併せて報告の予定である。

8 木簡の釈文・内容

(1)

「大和国高市 池田武市」
 山中 出カ

137×70×13 011

厚みのある板材に墨書したもので、四周は原形をとどめているが、墨痕は薄い。荷札であろう。

9 関係文献

奈良国立文化財研究所『奈良国立文化財研究所年報一九九八―II』（一九九八年）

同『飛鳥・藤原宮発掘調査出土木簡概報』一三（一九九八年）

（寺崎保広）

藤原宮出土の「大賛」木簡

奈良国立文化財研究所『藤原宮木簡』一の一九二号の上部接続断片が確認され、完形の荷札木簡となることが判明した。

「熊野評大賛塩塗近代百廿隻」

243×20×3 033



熊野評は後の丹波国熊野郡で、熊野評の木簡としては二例にあたる。近代の貢進例は二条大路木簡の志摩国につぐものである。「塩塗」は他の木簡にみえる「塩染」と同義で、保存のために塩をまぶして貢進したものと考えられる。「延喜式」には丹波国の諸国貢進御賛として、「塩塗年魚」がみえる。

ちなみに、「藤原宮木簡」一では「百廿隻」部分だけしか掲載できなかったが、これは写真撮影以前に盗難にあったためである。一九九〇年になって実物の所在が確認され、漸く完形の大賛木簡として目の目を見ることがなったのである。

（寺崎保広）